



読売俳壇

高野ムツ才選

ははそはの母に添ひ寝や春の夢

尾張旭市 小野 薫

【評】「ははそはの」は「母」にかかると「来る」の対比が、電車のリフレインで強調されて、鮮やか。「を」等の助詞を省略したのも大胆だし、動きが反対方向なのも効果的だ。舳から舳まで豆を撒きにけり

町田市 枝沢 聖文

【評】「のれそれ」は穴子の幼魚。高知辺りの方言だろう。ポン酢などで食べる。硝子器に盛られた透明な魚体に春のせせらぎを重ねた。母の遺影加えし部屋に雛飾る

北上市 佐々木清志

【評】今年、母の遺影を父の遺影に並べた。祖父母の遺影も掲げられていたのだろう。それら遺影の元、幼子たちの雛祭がまもなく始まる。春泥の靴垣越しの立ち話

川越市 大野有之介

四方山の話つなぐや木の芽和菜の花の上を 一列紅白帽

相模原市 荒井 篤

たんぼぼや千里の道も一歩より

東大阪市 渡辺美智子

海へ出る道いくすしも春田中

久喜市 深沢ふさ江

うららかなや女神踊れば岩戸開く

八王子市 徳永 松雄

噴煙のけふ一伸びし山笑ふ

東京都 望月 清彦

正木ゆう子選

桜行く電車菜の花来る電車

佐野市 村野 則高

【評】「桜」と「菜の花」、「行く」と「来る」の対比が、電車のリフレインで強調されて、鮮やか。「を」等の助詞を省略したのも大胆だし、動きが反対方向なのも効果的だ。舳から舳まで豆を撒きにけり

大東市 堀 志景

【評】舳は船首、舳は船尾。船の隅から隅まで豆を撒く。調べて意外だったのは、どちらの漢字も「へきき」。「とも」両方の読みがあることだ。浮御堂みつうみ瘦せし雨水かな

大津市 竹村 哲男

【評】浮御堂といえは、琵琶湖。水位の低下が心配されていた。二十四節気の「雨水」には、雪が雨となり、雪解が始まる頃。水位、回復するか。やつと春汝が好物を供ふべく

青森県 田口 昭子

水室神社の奥の暗がり二月果つ

浜松市 木通 佳子

春寒の廊下に足踏みミンチかな

奈良市 伊東 勝

親権の決まらぬ孫や梅一輪

大阪市 橋溝佳代子

鍋底に炒めし路の藪わづか

東京都 奥村 和子

剪定の枝とびこんで散りし鯉

入間市 豊泉 繁雄

小澤 實選

自転車を押しく土手や雉の声

柏市 小畑 昌司

【評】土手の春景色を楽しもうと、自転車から降りて押して歩き出すと、突然、雉の声が響いたというのだ。見渡したところが、見つからなかったか。それでもうれしい。闊歩する老犬老翁木の根明く

青森市 天童 光宏

【評】雪が残っている山野を年取った犬と翁とが元気に歩き回っている。木の根の回りの雪がとけてきたことも、犬と翁とを励ます。給食室へ一礼の子卒業す

伊勢市 藤田ゆきまち

【評】卒業の際に毎日おしい給食を用意してくれたみなさんに挨拶をしているというのだ。小学生であろうか、ものがわかつている。朝寝してインコの水をまづ替えむ

座間市 剣橋 こじ

煮えたる泡つばやきの繰り言か

日立市 菊池三三夫

タイマーをかけて切り干し戻したり

宇都宮市 佐藤 順子

うららかなや人力車夫のふくらばき

倉敷市 中路 修平

牙返る殺される側殺す側

横浜市 瀬古 修治

自販機の補充作業や春の草

川口市 蓮田 陽子

津川絵理子選

読み終へし本も記憶も春の炬に

相模原市 はやし 央

【評】読み終えた本を炬に焼く行為が意外であり、虚無的な雰囲気だ。記憶も一緒に燃やしてしまうのだからおそろいだ。春の炬の暖かさ、退廃の香を嗅ぎ取った。樹齢百年父の盆梅蕾持つ

長岡市 林 惣峰

【評】父が丹精込めて育てた盆梅。その父はこの世にいないが、樹齢百年の盆梅は生き生きと蕾を付けた。歳月の不思議さを改めて感じる。春うらら妻連れ去る観覧車

横浜市 菅沼 葉二

【評】中七下五には、楽しい休日のふとした寂しさが籠る。「連れ去る」の見立てが効果的で面白い。「春うらら」が少し皮肉に響く。水温む丸木三本組めば橋

神奈川県 中島やさか

しばらくは迷子であらうミモザ咲く

堺市 椋本 望生

エンディングノートは白紙春の雲

豊岡市 神谷みゆき

春塵や妻の買いくるまがい物

東久留米市 夏目あたる

夕景の尾根臘梅の花に透く

川崎市 沼田 広美

雪とけて名もなき草の名を知らず

新潟県 冬木 陽介

短歌あれこれ 久永草太 (歌人) 即詠させないで



先週に引き続き名古屋の中華料理店平和園の話題なのがこの店には客が短歌を書き残していく短歌ノートなるものがある。せっかくなので、一緒に来た歌人たちが、中華料理を題材に即詠することにした。即興で詠むと書いて「即詠」。正直あまり得意ではない。一首詠むのに二週間たって平気で溶ける。だから街で酔客に「へえ、短歌やってんの!」じゃあ「こで一句!」などと無邪気に絡まれると大変困る。困ったとき用に入じゃあ「こで一句!」と言う君に告ぐ、短歌は一句じゃなく一首!という歌を作ったくらいだ(いかに今考えたような顔で読み上げるとよい)。舞台は平和園に戻り、我がテール(ブル)の歌人どもは即詠に難産してすっかり黙りこんでしまった。とても楽しい会食とは思えない虚ろな目。話しかけても生返事。お分り頂けたらどうか。街で歌人を見かけても決して安易に即詠させてはならない。